

旭川のアイヌ語地名で、最も物議を醸しているのが、オサラッペ川である。それは、明治二十三年に旭川を調査した永田方正が、『北海道蝦夷語地名解』で、次のように地名解を書いたからである。

「o-saratpeオ サラッペ 女神玉門ヲ出シタル処。『サラ』ハ出スノ義。此處茅ナシ」

永田方正は、オサラッペ川の川口（川尻）には、「サラ sar 葦原（永田は茅と表記）」がないことをわざわざ明記し、「サラ sara」は「出す」の意味であると注記している。永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』で、六千余のアイヌ語地名解を書いているので、オサラッペ川は、単に、「オサラッペ川」ではなく、「オサラッペ川は、单に、「オサラッペ川」ではない」と注記している。

昭和五十九年に、山田秀三は、『北海道の地名』の中で、右の永田地名解、知里地名解を紹介した上で、「た

だ、土地の音が昔からオサラッペなどが気にかかる。近文の古老は、足

川尻に葦原のある川の義。それが転訛して、オサラッペとなり、オ・サラ・ペ（陰部・あらわれている・煮）などの意に俗解され、『女神玉門ヲ出シタル処』（永田氏『地名解』）など

の奇怪な伝説を生むに至った。」

昭和五十九年に、山田秀三は、『北海道の地名』の中で、右の永田地名解、知里地名解を紹介した上で、「た

だ、土地の音が昔からオサラッペなどが気にかかる。近文の古老は、足

原・川」でないことを暗示した上で、「女神が、玉門（陰部）を出した処」と伝説を書いたのであった。

既に紹介したところであるが、昭和三十五年に、知里真志保は、永田地名解に次のように真っ向から異論を唱えた。爾来、旭川では知里地名解が支持されてきた。

「おさらッペ川—原名オサルペツ

（o-sar-pet 川尻・葦原・川）。

石狩川を遡ると、ヲサラベツは左岸にあり、その川口が開けているので、「物を分ける」意味で名付けられた」というもの。また、武四郎は、丸木舟の中から、野帳の余白に、写真②のように伝説の岩「ノチウ（nociw 星）」をスケッチしている。

松浦武四郎は、この野帳を元に、公式日誌報文の「再窓石狩日誌」を著わした。前々回の写真②のノチウの添画の部分で、本文は、「サルブツ一川口巾凡十五六間（註・約三十畝）、前に一つの岩有、其風景よろし。本名オサラベと云よし。訳して物の終りと云事のよし。」と地名解には、野帳と異同がある。

本来はオサラベツという川名が、なぜ公式名称のオサラッペ川になつたのかの履歴を含めて、次回はオサ

一ノチウとオサラッペ川（下）

写真② ノチウのスケッチ

文化三年（一八〇六年）生まれのシイピラサからのオサラッペ川の貴重な聞き書きが記録されている。

写真①がその部分で、「ヲサラベツ左物をわける事を云。差開けし故云り」とある。ハルシナイから丸木舟で

石狩川を遡ると、ヲサラベツは左岸に

あり、その川口が開けているので、「物

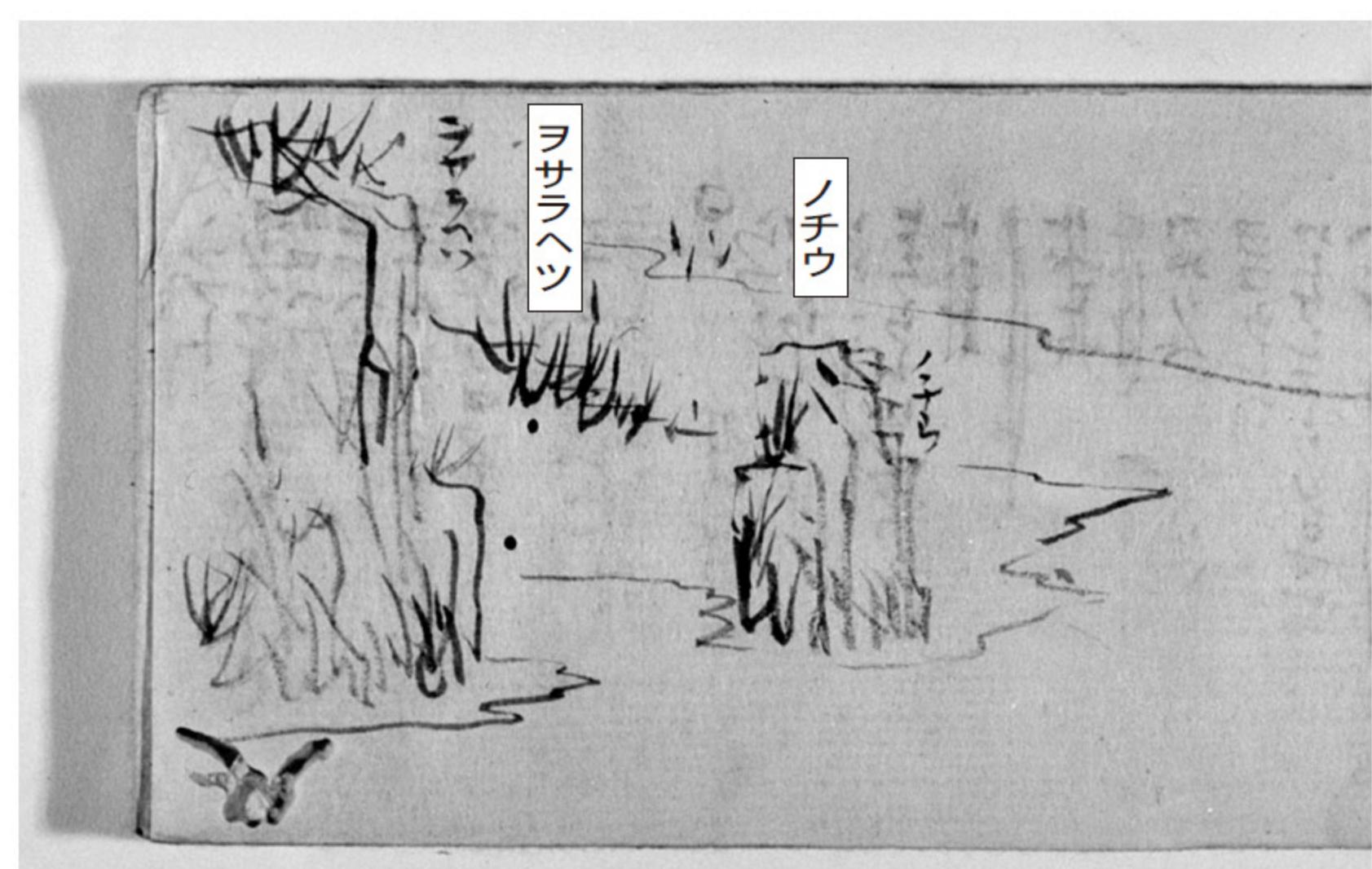
を分ける」意味で名付けられた」とい

うもの。また、武四郎は、丸木舟の中

から、野帳の余白に、写真②のように

伝説の岩「ノチウ（nociw 星）」を

スケッチしている。



八五七年）に旭川の調査時に

携行した野帳（フィールドノート）『E』第二番には、

（アイヌ語地名研究会幹事）

写真①

